

編集にあたって

日本の超高齢化は欧米や中国よりも数歩先行しており、いまや寿命 100 年時代と呼ばれています。このため私たち日本の医療者は教科書に記されている治療体系が想定していないプロファイルを持った患者群を治療する事態になっています。より脆弱で並存疾患を持つ患者が増えている一方、80 歳でもさらに 20 年程度の余命を想定して治療しなければならない、という異次元の世界に入りつつあります。

3つの観点から特集を組ませていただきました。まず近年明らかになった病態に関する知見と新しい画像診断技術です。脊椎アライメントはこれまで無関係と思われていた疾患の症状や予後、治療成績に大きな影響があることが知られつつあります。また PET/CT や拡散テンソルイメージングは新しい情報が得られる手法です。次に各種疾患に対する外科治療の進歩です。頸椎手術や胸椎 OPLL の治療法、さらには早期発症側弯症や成人脊柱変形などに対する外科手術と支援技術がアップデートされました。転移性脊椎腫瘍や脊椎感染の高齢者が増えつつあり、大学病院などの基幹病院はそれらの対応に追われています。これまで多くの脊椎外科医が変性疾患を主たるターゲットにしてきたと思いますが、我々の意識を変えなくてはならない時代になったと痛感しています。また骨粗鬆症やびまん性特発性骨増殖症があると脊椎骨折の予後は大きく異なりますので、これらの疾患を有する患者に対する手術治療を取り上げました。最後に低侵襲手術です。内視鏡除圧とともに経皮的椎弓根スクリューも治療体系を大きく変えました。脆弱性の高い患者ではこれまで以上に低侵襲手術の役割が高くなっており、変性疾患だけでなく感染や転移性脊椎腫瘍など適応も広がっています。今回は外傷に対する低侵襲手術も取り扱っています。

今回の特集は臨床経験豊富な先生方に多忙な時間を割いて執筆していただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。また読者の方々におかれましては、この特集が現在の脊椎外科について病態から診断、手術治療を学びながら全体像をつかんでいただく一助になれば幸いです。

2019年4月

自治医科大学整形外科

竹 下 克 志